

第三百十九回 青葉会

平成二十四年十月二十五日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

〈投句〉

福島正明 山崎亜也 山内天牛 伊賀山そらお 石川清 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 南平和夫

〈紙上選句〉

渡邊盛雄 赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

《選者吟》

柚子黄ばむ二泊三日の旅の間に
月の出や野球部員の走り込み

(青：上五を「月中天」とすると野球部員の熱心さが一層伝わってくると思ふ)

心奥(しんおう)のホームレス感聴く夜長

木道(もくどう)の左右に頷く猫じやらし

朝寒や徒歩通勤の速度増し

《互選句》

七点

☆ 話し手のいつしか聞き手土瓶蒸し
(「し」を詠み込んで韻を踏んでいる)

秋の灯の運河に重き倉の影

(小樽運河のゆったり重い流れ)

六点

独り言口から持ち去る秋の風
川越にて

☆ 秋日濃き江戸の町並み鬼瓦

四点

争ひの絶えぬ国境鳥渡る
後の月人の恋しき頃となり

ゆらゆらと競馬帰りの秋日傘

☆ 香りごと蒲団取り込む金木屋

☆ 海猫(こ)残る津波の抜けし魚市場

ノーベル賞の通知受け

爽やかや「塞翁が馬」と山中さん

志ん馬独演会

三点

落語聴く前後に軽く温め酒
出囃子の芸者ワルツや秋の席

山頂へ草の錦が這い上がる

志ん馬の「大工調べ」

爽やかに志ん朝弟子の啖呵かな

見番に舞台稽古の秋扇

(浄瑠璃古曲会50周年「助六」：團十郎の素踊)

銀杏(ぎんなん)を並べ干す人雲動く

☆ 麻酔覚め痛みに生還悟る秋

(青：良かったですね。麻酔が覚めたということは生還したということだから「生還」は言はず

もがな。むしろ「いのち」としたほうが良いと思う)

心づくしは茸づくしや里帰り

☆ 庭前に去年(こぞ)の倍咲く彼岸花

天高し日に日に孫は重くなり

ゴシックは撰者の天

万里子 (忠・弘・ゆ)
(青・三)

全 (紀)

全 (恭)

全 (灯)

堂哉 (万・弘・ゆ・灯・正・亜・天)

一灯 (孤・五・敏・ゆ・允・天・三)

そらお (堅・猛・五・龍・啓・亜)

ゆたか (万・恭・孤・允・天)

忠彦 (孤・五・允・く)

五郎太 (孤・龍・隆・亜)

弘子 (忠・灯・く・亜)

堂哉 (万・猛・弘・灯)

一灯 (万・孤・啓・三)

天牛 (堅・猛・敏・正)

紀久男 (猛・敏・灯)

弘子 (隆・正・亜)

猛 (恭・ゆ・三)

紀久男 (隆・啓・く)

全 (五・允・啓)

五郎太 (恭・亜・三)

健介 (万・ゆ・青)

恵洲 (堅・紀・孤)

和夫 (万・忠・敏)

天牛 (紀・敏・龍)

二点

友逝きて俄に秋の深まりぬ

そらお (啓・天)

☆ 新米の味に思わず笑み溢る

清 (猛・く)

☆ 天高し病軀に力充ち来たる

恭延 (万・允)

☆ 杖で佇む人の金木犀

全 (堅・く)

☆ 色鳥や葉叢を揺らす声高し

忠彦 (万・啓)

☆ 弁慶の昼夜継がるる神無月

五郎太 (紀・恭)

☆ 秋思には命のリレーといふことも

弘子 (敏・正)

☆ 浮世絵を肴にはずむ新走

恵洲 (堅・恭)

☆ 冬近しこけしは未来を考へる

ゆたか (万・弘)

☆ 秋日和ブラスバンドの校歌聴く

正明 (紀・五)

☆ 新涼や体調聞かれ順調と

全 (隆・青)

☆ 剪定の音繁き午後秋麗ら

和夫 (忠・隆)

☆ 斑鳩の秘仏豊満鶴(ひたき)鳴く

重也 (允・く)

團十郎・幸四郎の富樫・弁慶昼夜交代

盛雄 (紀・龍)

一点

☆ 富樫よし弁慶もよき秋狂言

紀久男 (堅)

☆ 秋うらら扇千景の若々し

全 (正)

(十月新橋演舞場のロビー)

☆ 弥陀ヶ原色とりどりの草紅葉

猛 (弘)

☆ 秋晴れや今日は良きことある予感

全 (堅)

☆ 秋麗(うらら)吟声競ふ同好の士

全 (正)

☆ 紅葉を眼下に谷川岳下る

全 (正)

☆ 嫁妊娠鬼子母神堂の秋高し

恭延 (灯)

☆ 白球は民家の窓へ天高し

忠彦 (隆)

☆ 指廻し掴まへれるか赤蜻蛉

全 (青)

☆ かわはぎにお酒の進む秋深し

五郎太 (忠)

☆ 弾みつくあんよトツトコ秋の園

弘子 (万)

☆ 紙切りの切り出す志ん生秋深し

弘子 (紀)

(林家正楽)

☆ 健康のほかは要らざり花カンナ

健介 (紀)

☆ 今日を生く木の実ひとつの身なれども

ゆたか (龍)

☆ 霧濡れの牧の暮色を牛の列

一灯 (猛)

☆ 秋深む止まり木に更けひとり言

全 (弘)

☆ 鳴き代る鶉(うぐさ)の径を北狐

全 (龍)

☆ 耳かきは嵯峨野の竹製秋温し

全 (天)

☆ 木の子から小人出て来る日暮れ時

全 (五)

☆ 花芒井筒の女の舞の袖

全 (隆)

☆ 色白の小町と名乗る今年米

昇 (万)

☆ 品書きにスイーツ並ぶ紅葉茶屋

全 (青)

☆ そぞろ寒鷺も線に止まりをり

規雄 (龍)

☆ 多摩の岡高きに登りて気を散す

全 (青)

☆ 朝寒やネクタイとやら思ひ出す

全 (忠)

☆ 颱風もこれで了(しき)ひか沖を行く

全 (三)

☆ ベートーベンの「田園」を聴く奈良の鹿

盛雄 (紀)

● 次回青葉会

十一月二十二日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)
十二月五日(水) 鈴木演芸場・昼の部見物(午後一時〜四時半)↓
九段下・琥珀にて年忘れ句会(午後六時〜九時)

以上 文責 紀久男

平成二十四年十月句会報

一 今回は先生以下12名出席。投句9名。猛さんの捌きで快調に推移。御覧のように堂哉さん一灯さんそらおさんの三名が高得点でした。

当日TV放映の石原都知事辞任と新党結成記者会見及び、パレレビ元イラン王妃への取材等、話題にしつつ寄贈の数々・・・先生のハロウィン菓子、弘子さんの最中（小石川・岡埜榮泉）、忠彦さんの「浦霞」純米吟醸、亜也さんの「手取川」大吟醸（石川県白山）等を賞味し、なお追加々々で盛会となりました。

ほかの話題（一）五郎太さん、城西国際大で英語での授業（紀尾井町）（二）猛さん網膜分離で来月手術（三）復興予算の流用（四）志ん馬独演会（五）各国のハロウィン（六）社友会ホームページに堅さん、五郎太さん、小森節也さんも登場等々

二 関係者近詠

繰返す被曝隠しや広島忌

万里子

悪童に取り柄ありけり茸狩り

恵洲

暮れなづむ母校をつつみ蟬時雨

全

—NHKラジオ「文芸選評」兼題・茸

秋立つや齢を当て合ふ優先席

全

西村和子選（10月13日放送）

旧盆や同姓ばかりの村の墓地

全

残照を包みて降ろすヨツトの帆
杖を櫂とし雲海に漕ぎ出でむ

孤舟

詩筵なほ別れ難なし酔芙蓉

全

暗黒街の帝王かごきかぶり

全

蚊遣火や親ばか振りも受け継がれ

眞希子

縁台にひとり碁を打つ蟬しぐれ

全

金魚来て小さな気懸り好転す

全

広角のレンズに余る秋夕焼

全

終戦日茶碗に見落とし飯二粒

全

「爽樹」11月号

全

關入の蜘蛛嫌ふ者庇ふ者

弘子

灯火親し言葉すくなに酌み交す

允章

寝冷えかも知れぬと猫に呟けり

全

竜淵に潜み太白あげにけり

全

賑やかに叔母の来てより孟蘭盆会

全

水澄むや影のびやかに松の枝

全

仏壇の鬼灯ぬらと艶のあり

全

生酒の銘は「助六」秋うまし

清

空の青見果てぬ底に秋宿る

全

大文字火床に立ちて火を想ふ

堂哉

秋の駅番ひの鳩の朝歩き

全

蜘蛛の巣も秋光の中登山道

全

サファリーの獣ら昼寝秋暑し

全

山の疲れ癒す町湯や秋深む

全

海風や骨組残すねぶた小屋

忠彦

コーラス部三店合同演奏会

全

線路果て貨車の赤錆びきりぎりす

全

秋晴や和気藹々の合唱会

全

「萬緑」十一月号

紀久男

秋晴や和気藹々の合唱会

紀久男

三 幸四郎一家の俳句

幸四郎は、安野光雅、岡野俊一郎、辻井喬（堤清二）、宮崎駿らと共に最年少（70歳）で文化功勞者になった。歌舞伎界では弟の吉右衛門や玉三郎が先にしかも年下で人間国宝になっているので本人としては欲しかったに違いありません。斯界では次は仁左衛門と目されており、歌舞伎立役としても余り評価されませんが新聞劇評は別です。母方の祖父・名優先代吉右衛門（人間国宝）は虚子の高弟でした。先代の芸は弟が承継ぎ円熟。俳句は幸四郎が腕を上げております。

一家の句を挙げてみました。

雪の日や雪のせりふを口ずさむ

先代吉右衛門（「松浦の太鼓」）

菊人形少し似てゐる吉右衛門

藤間正子（先代の娘。今の幸四郎の母）

満天星（どうだん）の花美しと妻の言ふ

松本白鸚（先代の娘婿・八代目幸四郎）

幾千の木漏れ日いだき山眠る

幸四郎（大岡信が「折々のうた」に載せた）

神の春とふとふたらりたらりらふ

全（森澄雄が絶賛）

木枯しの中に楽日の役者かな

全（森澄雄が高く評価）

打ち出して銀座は薫る月の道

松たか子（「俳句朝日」に掲載）

十一月九日

紀久男記